

街角には郷愁が漂う

シリーズ
街並み
再見

下田の旧街道に沿って歩く

◆ 静かな家並みに 時間の流れを見る

ひっきりなしに自動車を通い会う国道一六五号線と一六八号線がクロク入する交差点。ここは交通の要衝・香芝市を象徴するような一角です。それだけに騒音も少なからずうるさく、今という時代を考えさせられる所です。また、この界隈は郵便局、保健センター、市役所などが集まっている、いわば香芝市の心臓部でもあります。それだけに交通における重要性というものが、都市基盤の根

本にあるのだなと感じさせるのです。そういえばこの香芝市全体が、古代から中世、そして近代と交通の要衝として発展してきた街といえるのです。大阪と大和、伊勢などを結ぶ街道が、香芝市内を縦横に走っていました。伊勢街道、田原本道、堺街道が東西に、長尾街道、当麻道、太子道が南北に走っていました。これらの道は、あるいは産業道路として、またあるいは伊勢、当麻、壺坂、大峰への参詣道として重要なものでした。今も昔も変わらない香芝のイメージがここにあらうように思えます。



家先の小さな枯山水庭園が通り行く人の心をなごませる。

さて、鹿島神社の長い堀に沿って、神社の森の梢を見ながら、国道の交差点から旧街道へと歩いてみましょう。鹿島神社の社殿は新しくなったところのようで、清々しい木の香りがして来そうです。鮮やかな赤色、それもとりわけ深い紅色のような鳥居が道に向かうようにあるのが見えます。

この下田はこの鹿島神社の門前と街道の街として発展して来たのです。鹿島神社古図には門前の道沿いにすらりと家が並んでいるのが見られます。神社をあとにして、静かな通りを西へと急ぎます。途中に「下田」駅からの道と出会います。

自転車がすらりと並び、駅前はずっと広くなって、桜の並木が線路

の向こうにあり、鉄道の枕木の柵が昔懐かしいイメージを漂わせています。小さな駅舎は木造で、明治四十三年にこの下田駅が開設されたと記してありました。この駅が作られ、また昭和二年、近鉄大阪線の下田駅が開かれたところから、この下田の旧街道沿いから人々に流れが変わっていったのかも知れません。

古い店構えの種苗店があつて、その前を通ると、JR和歌山線の踏み切りがあります。カンカンカンとシグナルがなって、静かな家並みに響いています。

◆昔懐かしいお菓子に誘われる郷愁

踏み切りを渡ると、左手に大きな石造りの太神宮の常夜燈が建っています。回りを家々に囲まれてしまつて、心なしか身をすくめた感じでした。天保二年の銘がある、この堂々たる常夜燈は、この街道を通つた人々を、高い所からずっと見続けてきたに違いありません。きつと色々なドラマを知っていることでしょう。

常夜燈の向かいに、小さなガラス戸のはまつた店がありました。道からのぞくように見ると、昔懐かしいガラスケースに色とりどりの飴やガムが入っています。幼いころ、手に五円、十円硬貨を握り締めて通つた懐かしいお菓子屋。あてもんのガムやチヨコ、キャラメル、そしておばあさんの視線、今もまぶたを閉じる

と、生き生きとその時代がよみがえります。

思わず懐かしさでガラス戸を開けていました。この店はずっともとと文具を売っていたというところで、奥には「墨・筆」と書いた木の看板がかかっています。声をかけると年配の女性が出て来られ、十円のガムを買つて、口に入れました。甘いような甘くないような、郷愁の味、ほとんどイメージの中の食物ですね。そうしながら、お話しを聞くことができました。



昔懐かしいお菓子のある店先からは、少年時代への郷愁が漂ってくる。

「昔はたくさんさんの店があつたのですが、今はもうこのこと薬店さん、鮮魚店などほんの少しになってしまつて」とにぎやかだった時代を懐かしむように話してくれました。

隣の薬店の横に川が流れています。これは葛下川の支流の鳥居川で、そこにかかる橋のたもとに小さなお社がありました。これが金毘羅さんで、さつきの店の女性から、その縁日のことを聞いたばかりでした。そういえば夜店がずらりと出て、にぎやかですよといっていました。



ちょっと洋風とどっしりした大和風が絶妙なコントラストを見せている。

この金毘羅さんを取り込むように、大きな家があります。塀沿いに犬夜来があり、白い壁の蔵のようなものがあります。玄関の横の洋風の窓の建物と、大和造りの棟との対比がと



屋根には福を招くのだろうか、大黒様や布袋様がお座りになっていた。

ても面白く見えます。屋根の上には、大きな鍾馗さんが威風堂々と立っています。向かいも木造の昔風の家があります。近くの塀の角に大黒さんが乗っています。近頃は、恵比須さんが乗っていることもあります。

◆角を曲がるとかつてのにぎわいが聞こえそう

しばらく西へと行くと、右手に頑丈な土蔵とそれに続く大きな店構えがありました。今はもう閉じて、他方に移っているという荒物屋さんでした。びっくりしたのはうだつの大きさでした。色といい、形といい、なるほどと思わせるものです。隣の土蔵はしっかりと口を結んだように、金属の扉がはまっています。



旧街道の地蔵堂の前には昔の料理屋があったが、角のタイルがとても気になります。

◆ 水面に冬の二上山の姿が映って

葛下川にかかる橋をわたると道は突き当たります。右へと行くと、角に古い酒屋さんがあって、その突き当たりには現代的枯山水といった石組みが見えます。道は国道一六五号に出て、その向かい側に真宗寺の堂々とした建築があります。

左へと道を取ると、県道上中下田線で低い家並みが続いています。この辺でちよっととそれると、一人一人が通れるほどの細い小道が迷路のように走っています。石垣が続いて、暮らしの匂いがしてくるような、なぜかほっとする路地です。それは自動車が行かず、人のための道だからでしょうか。

しばらく行くと、古い納屋のような建物があって、その裏には池が広



左手は映画のようなイメージ漂う一角が、また右手には水上盆栽棚があり、不思議な雰囲気のある所。

がっていました。その光景は不思議なもののように見えました。寒々しい水面に、二上山やほとりに建っている家々の影が写って、映画のセツトのようなイメージがあります。この池は法楽寺池と呼ばれているようですが、そのほとりの家の盆栽棚が水面に張り出してあったのには、驚かされました。水上レストランならぬ水上盆栽棚というところでしょうか。



身代わり猿とかくり猿という奉納された物が、冬の風景に色彩を添えている。

家の隣には小さなお堂があって、丸い自然石がまつてありました。奉納されてある色とりどりのくり猿が、冬のとほしい色合いの風景の中で、ひととき美しく輝いています。向かいには古色蒼然とした法楽寺の建物がある公園が広がっています。その片隅に室町時代の作という五輪塔がひっそり立っていました。ふと首をめぐらすと家々の向こうに二上山が、今にも厚い冬雲におおわれようとしているのが見えました。

向かいにはよしずを張った魚屋さんがあります。隣に地蔵堂がありますが、ここにはクーラーが付いているのを見えました。地蔵堂にクーラーが、と首をかしげながら魚屋さんのおかみさんに聞いてみると、毎月お勤めがあるそうで、そのためか。「日切地蔵」という新装なったようなきれいなお堂の所は三差路となっていて、ここでは事故があまり起きないそうで、それもこの地蔵さんの御利益かもしれないとおかみさんは話していました。

また、この三差路からは当麻寺などの方へと街道が続いていたそうです。そのころはこの三差路辺りは、人力車などが発着して大いににぎわったと聞きました。

向かいには前は料理屋だったという建物があって、角が切り取られたようになって、下にはタイルが貼ってあります。何のためのタイルなのか、しばらく考えていましたが、とうとう分かりませんでした。

ここから国道の方へたどると、川沿いに南へと道は続いています。